こどもたちの健康と未来をまもる情報マガジン

こどけん通信

contents

●連載21 知りたがりの怒りんぼに笑いながらなろう!
耳かき一杯のデブリを取り出すために
引きも切らない ミスに次ぐミス
持続する「東電クオリティ」はなぜ許されるのか
ーおしどりマコ

●**フランス原子力ロビーと福島エートス（3）**
「早野・宮崎論文」と直結する仏原子力ムラのエートス・ネットワーク
ーコリン・コバヤシ

●**メガソーラーに 包囲される牧場**
未来を信じられる「持続可能なエネルギー」なのか？
「復興」の掛け声の下に埋もれているもの
片平 芳夫さん
ー石田 伸子

●シリーズ From 2011 ⑦
あのとき胸にしまった言葉をいま紡ぐ
ー和田 秀子
現実を知ることで被ばくリスクは下げられる
沢田 弘子さん
「気にしてはいけない」空気の中で
沢田 みのりさん

●なぜ裁判所は実地検証を回避するのか
木質バイオマス発電施設
住民訴訟から見えた問題と提言
ー久住 秀司

●「子どもたちの健康と未来を守るプロジェクト」（通称・こどけん）は、2011年より、お母さんたちとの座談会や勉強会、健康相談会、子どもたちの保養企画などの活動を行ってきました。
●2013年からは、子どもたちのリテラシー講座や、「通学路や子どもたちの遊び場の放射線量がわからなくて不安」という子育て中のお母さんたちの要望で、ホットスポット・ファインダーで測定、データ・マップにして配布する活動も続けています。
●『こどけん通信』は、放射線被ばくからの防護にかかわる情報を伝える冊子として、2016年8月から発行を始めました。
●読んでくださった皆さんからの感想や、こんな情報がほしい、こんな記事を読みたい、私も記事を書きたい、などのご意見やご希望など、どしどしお知らせいただければうれしいです。
kodoken2@gmail.comまでお寄せください。
＊ご注文もこのアドレスにお送りください。メールをいただければ、新しい号が出たときにお知らせいたします。3. 6. 9. 12月の月末発行です。

『こどけん通信』ブログ
http://kodomotatinomirai.livedoor.blog/
バックナンバーなどこちらをご覧ください

『こどけん通信』の発行継続をご支援ください!

●ゆうちょ銀行からのお振込み
コドモタチノケンコウトミライヲマモルプロジェクト
ゆうちょ銀行　記号 10060 番号 8791681
●他行からのお振込み
ゆうちょ銀行　金融コード　9900
店名 〇〇八（ゼロゼロハチ）
普通　口座番号 0879168
＊領収書などが必要な場合は、お手数ですが、メールでお知らせください。

こどけん通信
2024年9月28日発行
頒価 300円
●発 行 者　子どもたちの健康と未来を守るプロジェクト
kodoken2@gmail.com
●編集責任　石田伸子
●編集チーム　根本淑栄・吉田千亜
●編集協力　大野祐子・竹内美幸・伏屋弓子
●デザイン・イラスト　イズミコ

Vol.33
2024年 9月 秋号

メガソーラーに包囲される牧場

人々が未来を信じられる「持続可能なエネルギー」なのか？「復興」の掛け声の下に埋もれているもの

山地酪農を襲ったバブル時代のゴルフ場

相馬市玉野に、山肌を覆い尽くす130ヘクタールの広大なソーラーパネルが突如出現した。計画は以前から進行していたのだが、目の前に見えるようになって初めて、人々の関心を引くことになった。片平芳夫さんの牧場は、照り返すパネルの波に取り囲まれてしまった。まもなく設置工事は完了、年内には東北電力への売電事業が始まる計画だ。

片平芳夫さん

かたひら よしお

福島県相馬市玉野で牧場を経営する、県内唯一のジャージー牛の酪農家。濃厚な牛乳でつくるアイスクリーム店も営む。遠くからも食べにくる評判の店だ。生業裁判の原告でもある。

石田伸子

樹木を剝ぎ、表土を削り取る工事を何とか止め、山と牧場を守るために、片平芳夫さん（78）はたったひとりの闘いを始めなければならなかった。

自然との調和を図りながら牛と人とがはぐくんでいく「山地（やまち）放牧酪農」に魅せられて、27歳で脱サラした片平さんは、新天地の相馬市で牧場を切り拓いていた。1980年代後半、その片平さんを襲ったのがゴルフ場計画だ。

かつては地域住民の薪炭のための共有林だった周辺の山230ヘクタールが、5億数千万円で開発企業に買い占められてしまう。時はバブル経済、投資商品としてのゴルフ場会員権の価格はうなぎ上り。かたや安価な外材に国産材は駆逐され、「価値を生まない」日本全国のあまたの山林が、ゴルフ場やスキー場、リゾート開発に売却されていった。国策は、水源であり、農林業・漁業に恵みをもたらし、災害を抑止する機能ももつ森林を乱開発から守る……のではなく、「リゾート法」をつくって、放置されてきた山林の開発や転売バブルを後押しした。

地権者でただ一人、買収に応じない片平さんのもとには、業者が「1億円で手を打たないか」と大きなバッグを持って来た。業者は片平さんに、にべもなく追い返されたが、しかし、たった一人の抵抗だ。県の認可が下り、すわゴルフ場造成が始まるか、というそのとき、「神風が吹いた」（片平さん）。バブルが崩壊したのだ。転々と会社をたらい回しにされた挙句、税金の滞納により土地は差し押さえられ、国の公売にかけられることになった。

安い買い物が巨額の富を生む

ある日、片平さんに国税局から封筒が届く。開けてみると公売の案内だ。ゴルフ場用地だった林野は、どうにも買い手がつかず、隣接住民に入札を促したのだった。最低価格は230ヘクタールが4780万円。今となれば、この時、無理にでもこの土地を買えていたら、との思いはひとしおだが……息子と算段してみたりもしたが、実際の入札になれば1億円くらいには上がるかもしれない……どうにも無理だ……。

ところが、「聞くところによれば、実際の売却額は最低価格の6割ほどだったともいわれます。そんなことがあるなんて、つゆほども知りませんでしたから」

元は5億数千万円の土地がほぼ20分の1に。手に入れたのは「ZENホールディングス」という会社の社長、麦島善光氏だった。この会社、バブル崩壊後、公売にかけても買い手がつかず、さらに値引きされて安くなる土地を調べ上げては買い集める、ということを常套手段としているようだった。日本全国にそうした土地を3万ヘクタール所有するともいわれている。この麦島氏、2021年7月、静岡県熱海市で川の上流の違法な盛土が崩壊、大規模な土石流が起き、28人の住民が亡くなった土砂災害の、その盛土の土地を買い受けていた所有者である。

その麦島氏の所有となった玉野のメガソーラー用地は、現在も所有は麦島氏だが、発電事業はいくつかの変更を経て最終的にアメリカ企業に移り、「合同会社相馬伊達太陽光発電所」として林地開発許可を取ってのち、現在は「相馬土地合同会社」となっている。ちなみに、メガソーラー開発は、全国各地で自然破壊、土砂災害などで問題になっているが、その多くがやはりバブル崩壊後に塩漬けになっていたゴルフ場用地であり、また多くが外資の参入事業だという。福島市近くで進むメガソーラー開発もオランダ企業だ。「安い日本の山林」は、ここでも外資に侵食されている。

「再生可能エネルギー」という名のもとの大規模な自然破壊

この激安の土地を利益を生み出す山にしたのは、2011年3月の福島原発事故だ。麦島氏が土地を取得したのは2011年8月。2012年、福島県は、「2040年度を目途に県内総エネルギーを再生可能エネルギー100％へ」と目標を掲げる。これによって、ソーラー、風力、地熱、バイオマス発電などが強力に進められることになる。そして玉野のメガソーラー事業が認可されたのが2013年だ。

片平さんは2017年からすべての記録を取り続けている。何冊ものノートには手書きの会議記録や報道資料などがびっしり。情報公開請求した資料のファイルも膨大な量になる

「このメガソーラー計画は、2012年、固定価格買い取り制度（FIT）が始まった時期に始まり、当時の買取価格（大規模事業用）は36円／kWhでした。再生可能エネルギー事業を推進するために、家庭での発電の買取価格の3倍以上の極端な高値を設定して、開発業者を優遇したんです。現在は9円程度まで下がっていますから、今はもう、工事費が莫大なメガソーラーは割に合わなくなっています」

樹木を根こそぎにしたことによる災害の危険、水資源の保全への不安、事故や災害時の責任の所在、20年とする事業期間終了後のパネルの処理、山の水流や調整池の維持管理は誰が責任を持つのか、など、住民説明会でいくつも出された疑義に、事業者としての明確な答えがないまま、通り一遍のアセスメント（環境影響評価）調査ののち、県は林地開発許可を出した。

災害や事故、あるいは事業終了後、事業者が責任をとらなければ、リスクは自治体と地元住民が負うことになる。片平さんは相馬市議会や市民、漁業者などへの様々な働きかけを行ってきたが、しか

し、開発に抗う声を上げたのは、ほんのわずかな人だけだった。

売却を拒否して牧場は守ったものの、牧場の上部の山林は開発予定地になってしまっていた。そこにソーラーパネルを設置されてしまったら、水源を断たれる。片平さんは、バリケードを作って道路を封鎖し、工事のための測量を阻止した。また県からの事業者への指導もあり、なんとか牧場に連なる約23ヘクタールの山林は、手つかずのまま残すことができた。それにより減った分は事業者が地元住民の山林を借地として借り、ソラーパネルの設置面積130ヘクタールを確保した。

片平さんの牛たち。牛舎と放牧

置き去りにされているものは何か

この玉野集落では、2011年、酪農仲間が「原発さえなければ」と牛舎の壁に記して自ら命を断ったことが大きく報道された。原発事故によって長年培ってきた生業を奪われ、自死したり、心を病んだり、家族が崩壊した農家は、ほかにもあるという。そうした無念の思いは、伝わる先も失って、「復興」の名の下にかき消されてしまっている。

原発事故のもたらした被害は、様々な形をとって、重層的に、暮らしや、人の心や、人間関係を、壊し続けているのではないか。人が生きていくためにほんとうに大切な、守るべきもの、再建すべきものは、ちゃんと「復興」に入っているのか？　未来を信じようとする人々の、人生の基盤を立て直し、豊かにするための優先順位は、おそろしく転倒しているのではないか？

かろうじて牧場を守った片平さんは、若者たちとともに新たな牧場を拓いていく構想を描いてきた。描こうとする将来の展望を妨害するものとして立ち現れたのが、「持続可能な再生エネルギー政策」だというのは、何と皮肉なブラックジョークか。

片平さんの話には、その人となりを表すエピソードがある。メガソーラー計画を進める麦島氏を説得に行ったというのだ。東京の会社を訪ねると、先約で詰まっていると2時間以上待たされ、待ちに待ってやっと会えた麦島氏に、片平さんは諄々と、山地放牧酪農がいかに自然と調和しながらはぐくむ酪農であるかを語り、麦島氏が広大な土地を所有するのであれば、日本の山の自然を守りつつ、食料の生産に取り組んではどうか、と提案したのだ。麦島氏は話を聞き、それでは一緒にモデルとなる旭川の牧場を見に行こう、と約束までした……つもりだった。が、結局約束は反故にされた。

人間の誠意を信じ、議論を諦めず、やれることのすべてをやるのが片平さんなのだった。相手は所詮「金が至上」だったのだが。「自分が甘いというか、愚直だったんですよね」と苦笑する片平さんだが、愚直上等！だ。

最後に、片平さんの「今の思いです」というメッセージをお伝えしたい。

「緑うっそうとした約130ヘクタールの山々は、丸2年の歳月を経て、無数の太陽光パネルに覆われてしまいました。形を変え、裸になった山肌は、周囲の自然景観とは到底相容れない異様な光景。6年半にわたる反対運動から見えてくる、官民一体のなり振りかまわず金まみれの開発。自然災害大国の日本に、新たに災害の種をつくり、自然への畏れ（恐れ）を失くしてしまった人の心の愚かさ。一度生態系を大きく壊してしまった山（自然）は、二度と元には戻せない。このメガソーラーを止められなかった無力な自分を感じます。」

シリーズ From 2011

あのとき胸にしまった言葉をいま紡ぐ

7

福島第一原発事故を経験した被害者たちは、いまなお言葉にできない思いを、苦しみを、抱え続けています。事故当時、まだ幼かった我が子にほんとうのことを話せなかったおかあさん。幼いながらに親に気を使い、言葉を飲み込んだ子どもたち。原発事故から13年以上が経って、いまだからこそ言葉にできる「あのとき胸にしまった言葉」があります。このシリーズでは、事故当時をふり返り、その思いに耳を傾けます。

和田秀子（ままれぼ出版局）

今回お話しをうかがった沢田さん親子は、いわき市出身。茨城県への引っ越し直前に東日本大震災と原発事故が起きたため、引っ越し業者を見つけるのに苦労したそうです。

引っ越し先の茨城県では、「被ばくリスクを避けられる」と思っていましたが、実際に測定してみると、茨城県でも放射線量が高く、いわきと変わらなかったといいます。

現在は、いわきに戻って生活しているおふたりですが、いまも被ばくに配慮した生活を送っています。

現実を知ることで被ばくリスクは下げられる

沢田 弘子 さん（仮名・54歳）いわき市→茨城県→いわき市

夫の転勤が決まり、家族で茨城に引っ越しする直前に、東日本大震災と原発事故が起きました。

ちょうどあの日、2011年3月11日、私と夫は、当時小学校4年生の長女・みのり（仮名）と、小学校2年生の長男・健太（仮名）をいわきに残して、引っ越し先の茨城に家の下見に行っていました。

茨城から帰る途中に立ち寄ったショッピングセンターの駐車場で大きな揺れに襲われ、「ただごとではない」と感じた私たちは、すぐいわきに残した子どもや祖父母に連絡しました。しかし、すでに携帯は通じない。何が起きているのか。車のラジオをつけて必死に情報を集めました。

断続的に揺れが続いていたので、高台にある市役所の駐車場に車を止めて、一晩過ごすことにしました。子どもたちや祖父母のことが気がかりでした。

翌12日、波打った国道6号線を通り、いわきに帰る途中で、ママ友からショートメールが。

〈子どもたちも、おじいちゃん、おばあちゃんも、全員無事。学校の避難所にいます〉

あのときは、ほんとうに胸をなで下ろしました。その連絡と入れ替わりに、別の知人からは、〈できるだけ遠くに逃げて！〉というメールも……。どうやら原発が爆発したようだということはわかりましたが、当時は、放射性ヨウ素やセシウムが飛び散っていることまでは、知るよしもありませんでした。

いわき市内の体育館で子どもや祖父母と再会したのは、12日の夜9時過ぎ。みんなの顔を見て安心し、涙があふれました。

自宅はモノが倒れてぐちゃぐちゃ。とても眠れる状態ではありません。断水し、揺れも続いていましたから、家族全員、避難所で過ごす日々が始まったのです。

13日には避難所で、子どもや40歳未満の人たちに安定ヨウ素剤が配られましたが、飲むようにという指示はありませんでした。

原発が次々と爆発するなかで、荷物をまとめて避難所を出ていく人が増え、100人ほどいた人たちが30人程度に減少。閉め切っていても、体育館の上部からは冷たい空気が入ってきます。この空気にも放射能が含まれている、と思うと、子どもたちを守ってやれていない罪悪感に苛まれました。

できるだけ早くここを離れたい。でも、予定していた引っ越し業者と連絡が取れない。あとになってわかったのですが、引っ越し業者の従業員も、みんないわきから逃げていたようです。

原発から近距離のいわきに来てくれる業者は、なかなか見つかりません。あちこち電話して、ようやく見つかったのは3月下旬。予定より遅れた4月2日、まだ仕事が残っている夫をいわきに残して、ようやく茨城県へ転居できたのです。

第一原発に住めば、といじめられ

みのりは転校先の友だちに恵まれ、すぐに学校になじむことができましたが、健太は辛い思いをした